

かる子ちゃん



(二)

桜 田 佐

サーッサーッ、ゴッゴッ、と風が吹きます。ぐーい、ぐーい、ぐーい、ぐーい、と枝がゆれます。かる子ちゃんはとうなるでしょう。

かる子ちゃんのうちでは、おかあさんとおにいさんとおねえさんが心配しています。

「まあ、ひどい風、かる子ちゃんどこにいるのかしら。」

「早く帰ってこないかな。」

「また木の上で小鳥とあそんでるんじゃない？」

三人は窓からのぞいてみて、びっくりしました。かる子ちゃんは高い高い桜の木の一ばん上の枝につかまっています。いまにとばされそうです。

「かる子ちゃん、かる子ちゃん、」と三人いっしょに大きな声で呼びましたが、風の音はげしいし、高い高いところにいるので、なんにも聞えないようです。

「かる子ちゃん、かる子ちゃん、」と三人はもっと大きな声で呼びましたが、やっぱり聞えません。

かる子ちゃんは、からだをあっちこっちにゆすぶられ、吹きとばされないように一生けんめい木の枝につかまっていますので、とても、うちのほうなんか見ることはできません。かる子ちゃん

も、おかあさんたちを大きな声で呼ぼうと思いましたが、なかなか声が出ません。

「お、か、あ、さ、ん、お、に、い、さ、ん、お、ね、え、さ、ん、」

なんの返事ありません。声も小さいし、風がつよいので、おかあさんたちには、この声が聞えないのです。

「お、か、あ、さ、ん、お、に、い、さ、ん、お、ね、え、さ、ん、」かる子ちゃんは泣きだしそうな声で叫びました。

このときです。むこうのほうから大きなかが一わ、すーっととんできました。そして、かる子ちゃんのそばにピタッととまりました。たかは大きなはねをひらいてかる子ちゃんのからだを風にとばされないように守りました。

「あつ、おかあさん、大きなかが。」

と、桜の木を見あげていたおにいさんが言いました。

「はねをひろげて、かる子ちゃんに風があたらないようにかばっているわ。」

とおねえさんが言いました。

たかは大きなはねで、かる子ちゃんをかかえるようにして、風をふせぎました。

そのうち、やっと風がやみました。

たかは大きくはばたきをして、とびたつていきました。かる子ちゃんは、「たかのおじさん、ありがとう、ありがとう。」と言って、ぴよん、ぴよん、と枝をとんで下におりました。そして、うちへ帰りました。

「あぶなかつたわね、かる子ちゃん、これから気をつけましょうね。」

かる子ちゃんは、おかあさんの言うことをよくきいて、風が吹いてくると、いつでも、いそいでうちに帰りました。

お天気の良い日は、お池のまわりや桜の木はたいへんにぎやかです。

ビービービービー

チュンチュンチュンチュン

ピーチク ピーチク ピーチク ピーチク

クルクルクルクルクルクル

ポッポッポッポ

ビーグル ビーグル ビーグル

チチチッ チチチッ チチチッ

ケキヨ ケキヨ ケキヨ

かる子ちゃんは毎日毎日、小鳥たちといっしょにあそぶので、小鳥たちの話が、よくわかります。かる子ちゃんのそばにいる小鳥たちも、かる子ちゃんのことばがわかります。あたたかくなつたので、小鳥たちは元気にとびまわっています。そして、いろいろの芸げいをして、かる子ちゃんを喜ばせました。ひばりはヒューと高くとんでいって、まっすぐにすーっとおりてきます。きつつきが木の幹みきをとんとんとたたきます。つぐみがくるくるくるると、でんぐりがえりをしました。

「まあ、おもしろい。」とかる子ちゃんは枝にこしかけたまま手を打って喜びました。

そのとき、一わのすずめがきて、こんなことを言いました。

「あっちの竹やぶのそばのつばきの花が、とってもきれいだよ。」すると、大ぜい集まっていた鳥が、

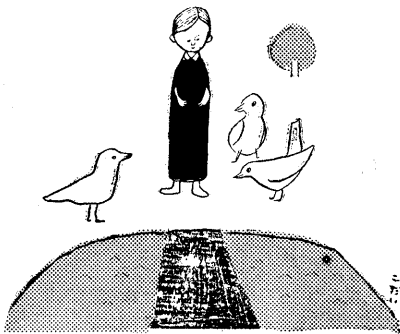
「ぼく、見にいこう。」

「わたしもいこう。」

そう言って、みんないっしょにバツととんでいきました。

かる子ちゃんひとり残されました。かわいそうですね。

かる子ちゃんもとんでいきたかったのです。だけど、はねがないからとべないのです。



「ああ、わたしもとびたいな。どうしたらとべるかしら。」

それからは、かる子ちゃんとはぶことばかり考えました。どうしたら、鳥のようにとぶことができるかしら？ この手のはねにならなにかしら？ かる子ちゃんは両手をひろげてはたばた振ふってみましたが、とべません。いくら振ふっても、手ははねにはなりません。かる子ちゃんは、とぶことばかり考えています。ある日、かる子ちゃんはおかあさんにたずねました。

「おかあさん、わたしとべないかしら。」

「それはだめよ。いくらかるくてもとぶことはむつかしいわ。」

すると、おにいさんが、

「かる子ちゃんは鳥と話ができるんだから、

鳥に頼たのんでごらんよ。」

と言いました。

そこでかる子ちゃん
は、お池のそばの、大

ぜいの鳥に話しかけました。

「わたし、とびたいの。あなたがたみたいにとびたいの。とびたくて、とびたくて、たまらないの。」

鳥たちはそれをきいて、なんとかして、かる子ちゃんの願いをかなえてあげようと思いました。しかし、なかなかよい考えが浮かびませんでした。そのとき、ちょうどむこうの梅の木から、お池の水を飲みきたうぐいすが、

「ホーホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、キヨ、キヨ、キヨ、キヨ、」と鳴きました。それは、

「そんなら、ぼく、いいおばあさん知ってるよ。あのおばあさんなら、きつととべるようにしてくれるよ。」と言ったのです。かる子ちゃんにはちゃんとわかります。

「そのおばあさん、どこにいるの？」とかる子ちゃんがききました。うぐいすにも、かる子ちゃんのことばはわかります。

「ケキヨ、ケキヨ、遠いよ、むこうの山のおふもとだよ。ぼく、このごろだいぶひまになったから、つれてってあげてもいいよ、ケキヨ、ケキヨ。」

梅の花が咲いているころは、毎日とてもいそがしかったのですが、ようやくひまになりました。そこでかる子ちゃんは、うぐい

すに、そのおばあさんのところへつれてってほしいと頼みました。

「ねえ、うぐいすさん、そのおばあさんって、にんげん。」

「ケキヨ、ケキヨ、違ふよ、もち、鳥のおばあさんだよ。とてもこわいおばあさんだけど、かる子ちゃんにはきつとしんせつだよ、ケキヨ、ケキヨ。」

「ぜひ、つれてってね。」

「ケキヨ、ケキヨ、じゃ、あしたの朝、ぼく、お池のところまでむかえにきてあげよう、ケキヨ、ケキヨ。」

その翌朝、かる子ちゃんは早く起きました。おにいさんはびっくりしました。

「かる子ちゃん、今日は早いんだね。」

「ええ、わたし、とべるように頼みに行くの。」

「へえ、こいつはおどろいた。だれに頼むんだい？」

「鳥のおばあさんに。うぐいすがむかえにきて、わたしをこわいおばあさんのところへつれてってくれるの。でもそのおばあさん、わたしにはともしんせつなんですって。」

お池に出ると、もう、うぐいすが待っていました。うぐいすは空を低くとび、かる子ちゃんはやあしで、その下を歩きます

た。町を通り、村を通り、畑道はたけみちを通り、たんぼ道たんぼみちを通り、ようやく山道やまみちにさしかかって、うすぐらい森の中の大きな杉すぎの木の前までくると、「ケキヨ、ケキヨ、ここだよ、かる子ちゃん。その杉すぎの木の下に小さなあながあるから、その前で、『おばあさん、おばあさん、お願いがあつてまいりました。どうか中に入れてください。』と頼たのむと、おばあさんが、『おはいり』って言うよ。ひとりでなくちゃだめなんだ、だから、ぼく帰るよ、ケキヨ、ケキヨ。』こう言いって、うぐいすは、いってしまいました。

木きがしげつているので、うすぐらくて何時なんじかよくわかりませんが、たぶん、おひるごろでしょう。かる子ちゃんかるこちゃんは杉すぎの木の下したの小さなあなの前で、大きな声こゑで言いいました。

「おばあさん、おばあさん、お願いがあつてまいりました。どうか中なかに入れてください。」すると、奥おくのほうから、太ふとい低い鳥とりの声こゑが

聞きえました。

「ボーボーボー、おそい、おそい、おそい、あしたまた、きなさい。」

幼児教育講習会

期日 昭和三十三年七月

二十一日～二十五日

(午前九、〇〇～午後四、〇〇)

会場 お茶の水女子大学講堂

科目

第一部 (午前)

幼児教育の理論

第二部 (午後)

幼児のリズム指導

主催 お茶の水女子大学付属幼稚園内

日本幼稚園協会

幼児の教育 第五十七巻 第六号

六月号 © 定価 五〇円

昭和三十三年五月二十五日印刷
昭和三十三年六月一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします。